

森信三著「修身教授録、現代に甦る人間学の要諦」致知出版社、1989年3月31日刊を読む。

## 第9講—読書—

1. 読書の我々の人生に対する意義は、「心の食物」。
2. よほどのことがない限り、1回の食事を欠くことさえめったにない。  
かなりの病気でも、食物の種類が変わるだけで、全然食物を摂らないことは、ほとんどない。  
健康時には、わずか、1時間でも、否、30分でも、食事が遅れると、若い人は、なかなか我慢し切れないでしょう。
3. ところが、ひとたび「心の食物」と言うことになると、我々は、平生それに対して、果たしてどれほどの養分を与えていると言えるでしょうか。  
身体の養分と比べて、いかにおろそかにしていることか。あらためて言うまでもないでしょう。
4. 「心の食物」という以上、それは深くわれわれの心に染み透って、力を与えてくれるものでなくてはならないでしょう。  
ですから、「心の食物」は、必ずしも読書に限られるわけではありません。いやしくもそれが、わが心を養い太らせてくれるものであれば、人生の色々な経験は、すべてこれを食物と言ってよいわけです。
5. したがってその意味から言えば、人生における深刻な経験は、たしかに読書以上に優れた心の養分と言えましょう。
6. だが同時にここで注意を要することは、われわれの日常生活の中に宿る意味の深さは、主として読書の光に照らして、初めてこれを見出すことができる。  
もし読書をしなかったら、いかに切実な人生経験といえども、真の深さは容易に気付きがたい。
7. 否、気付かないですむだけならまだしも、かような重大な意味を持つ深刻な人生経験というものは、もしその意味を見出しこれを生かすことができなければ、時には自他を傷つける結果にもなると言えましょう。
8. 人生の深刻切実な経験も、もしこれを読書によって、教えの光に照らしてみない限り、いかに貴重な人生経験と言えども、一人その意味がないばかりか、時には自他ともに傷つく結果にもなりましょう。

9. こういうしだいですから、読書はわれわれの生活中、最も重要なものの一つであり、ある意味では、人間生活は、読書がその半ばを占めるべきだとさえ言えましょう。  
すなわち、われわれの人間生活は、その半ばはこれを読書に費やし、他の半分は、かくして知りえたところを實踐して、それを現実の上に実現していくことだとも言えましょう。
10. もちろんここに「半ば」と言うのは、内面的な釣合いの上から言うことであって、決して時間の上から言うことではありません。しかし、読書は、われわれの生活半ばを占めるほどの重要性を持つにもかかわらず、人々の多くはこの点に気付かないようであります。
11. その人にして、いやしくも真に大志を抱く限り、そしてそれを実現しようとする以上、何よりもまず偉人や先哲の歩まれた足跡と、そこにこもる思想信念のほどとを窺わざるを得ないでしょう。
12. すなわち自分の抱いている志を、一体どうしたら実現し得るか、千々に思いをくだく結果、必然に偉大な先人たちの歩んだ足跡をたどって、その苦心の跡を探ってみること以外に、その道のないことを知るのが常であります。ですから真に志を抱く人は、昔から分陰を惜しんで書物をむさぼり読んだものであり、否、読まずにはおれなかったのであります。
13. そうした人を探すなら、二宮尊徳とか、吉田松陰というような名が、すぐに浮かんでくるでしょう。  
読書などというものは、元来人から奨められるべき性質のものではないでしょう。
14. つまり、人から奨められなければ読まぬという程度の間人は、奨めてみたとして、結局大したことはないからです。しかし、人間界のことは、お互いに一足飛びに行くわけにはいきませんから、その方面から言えば、読書を奨めるということも、必ずしも無意味ではないと言えましょう。何を読むべきか、また、いかに読むべきかということさえも、相手しだいではこれを示すことが親切だとも言えましょう。
15. 諸君らにして、真に大志を抱くならば、人から読書を奨められるようではいけないと思うのです。すなわち、人から言われるまでもなく、自らすすんで、何を讀んだらよいかを、先生におたずねすべきでしょう。
16. 読書はわれわれ人間にとっては心の養分ですから、一日読書を廃したら、それだけ真の自己は『へたばる』ものと思わなければなりません。肉体の食物は一日はおろか、たとえ一食でも欠いたら、ひもじい思いをするわけですが、心の養分としての読書となると、諸君の実際はどうでしょうか。
17. 今日、自分は心の食物として、果たして何を取ったかを反省してみれば、誰だってすぐに分かることです。口先ばかりで、心だの精神だのと言ってみても、その食物に思い至らぬようでは、単なる空語しかすぎません。

18. 「一日読まざれば一日衰える」と覚悟されるがよいでしょう。  
世間で篤農家とか、精農と言われる程の人物は、ほとんど例外なく、非常な読書家だということです。
19. われわれは、真の確信なくしては、現実の処断を明確に断行することはできない。ところが、真の明確な断案というものは、どうしても道理に通達することによって、初めて得られるものです。そこで、偉大な実践家というものは、一般に大なる読書家であり、さらには、著述をものし得ている人が多いと言えるわけです。
20. 「偉大な実践家は、大なる読書家である」という言葉の意味が分からぬ程度の人間は、とうてい問題にはならないわけです。もちろん学者と実践家とでは、同じ書物を読むにしても、その読み方は違いましょう。学者は学者としての職責上、細部にわたる研究もしなければなりません。実践家の読書は、大観の見識を養うための活読、心読であって、その点、実践家の読書の方が自在だとも言えましよう。
21. 将来、ひとかどの人間になろうとしたら、単に学校の教科書だけ勉強していて、それで事がすむような姑息低調なことを考えてはいけません。もちろん学校の教科書は、基礎知識として、いわば、土台固めのようなものですから、決してこれを軽んずることはできません。しかし、単に教科書の勉強だけで事足りると考える程度では、ちょうど土台だけ作って、その上に家を建てることを知らないような愚かさだとも言えましよう。そもそも学校で教わる教科というものは、土台程度のものでしかない。もちろんその土台は、深くかつ堅固でなければならないこと、言うまでもありません。
22. 現在学科に追われて読書のできないような人に、どうして卒業後などできるはずがありません。将来、真になすことがあるのなら、なるほどいろいろ忙しいことはあるでしょうが、単なる教科の予習復習だけで事がすむなどと考えないで、何とか工夫して、少しずつでもよいから、心の養いとなるような良書を読むことが大切でしょう。

P61 ~ 68

<コメント>

尊敬する教育者、森信三先生の読書についての愛情あふれるご説明。是非、お手に取ってご一読を。

— 2018年7月20日（金）林明夫—